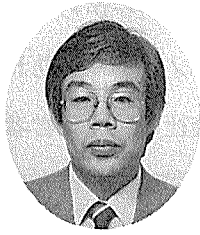


壁の向うの人々



八戸工業大学

教授 諸戸靖史

欧米については多くの人達がよく行き、よく留学し、よく説明している。そこで、ここでは、ソ連・東欧の大学人との交流のささやかな断面について記してみたい。

もう20年前のことになる。

冷戦時の国際構造の中における一方の超大国であったソ連邦の首都モスクワで国際土質基礎工学会議が開催された。そのポストコンファレンスツアーでモスクワから黒海沿岸のソチに向う飛行機の中で突然坂本九の‘上を向いて歩こう’（海外ではスキヤキソング）が流れた。日本人団体へのサービスであったのであろうか。今のエアロフロート（ソ連の航空会社）はサービスらしいサービスは無く、人間を家畜同然に運搬している。

その20年前のソ連邦の首都モスクワの表情は一見安定していた様に見えた。治安も良く、外貨店の品数も豊富であった。モスクワ大学の屋上まで特別に登らせてもらったし、ポリショイサーカスもそれなりに面白かった。メトロ（地下鉄）も深い所を走っており、その駅もゆったりして、博物館のような印象を与えていた。ただ、市民が外国人と会えばドルと交換してくれとせがんでいることが気になった。自国の通貨よりも外貨を好んでいたことになる。経済システムの破たんはすでにもうこの頃から顕在化していたのかもしれない。小生はこはく的首飾りを女房の土産に少し無理をして買ったが、最近のソ連ではその様な良質のこはくは店頭に見られない。空の玄関シェレメチェボ2も薄暗くただの混雑の他には生気が消えうせてしまっている。

ベルリンの壁が崩壊する前と後にソ連邦を経験した。そのソ連邦に抑圧されていたチェコスロバキア、ハンガリー、ユーゴスラビアの大学を訪れたのは10年前のことである。

ブタペスト工科大学の土木工学科土質研究室の助教授B博士は母国での教員生活に満足していなかった。英語とドイツ語が出来るので、外国で職をえようとしていたようであった。その後西ドイツのハンブルグ、アフリカのウガンダ、ドイツのハノーバーから手紙をもらった。ハンブルグで会ったときは少ししょぼくっていたが、昨年ハノーバーを訪ねたときはみちがえる様に貫禄がでていた。ここで、土質コンサルタント会社の共同経営者になり部長職にあった。ドイツが統一されて仕事一杯ある。1日に12時間働かなければならないが、ハンガリーの1ヶ月分の給料を1日で稼いでしまうと喜々としていた。

サグレブ工科大学（旧ユーゴスラビア、クロアチア共和国の首都にある）の土質研究室のK君は最近 Moroto's parameter……という論文を送ってくれた。日本がクロアチアの独立を認めてくれたことに感謝すると書き添えてあった。例のドサクサで機構が分裂し、日本の土質工学会が出している“Soils and Foundations”を他にとられてしまったので何とか入手する方法はないものかという。小生は学会に連絡し一肌ぬぐことにした。

プラハの有名なレストラン‘ウ・カリハ’でスロバキアのB教授と知り会いになった。主人が東大に短期滞在するので彼女もその機会に来日する。会いたいとブラスティラバから連絡が入った。昨年の夏、猛暑の東京で再会した。彼女は自分が呼び出したのだからとなけなしの外貨である円をハンドバックにしよばせて八重州口の“銀の鈴”までやってきた。日本人はあまり太った人がいないから働き者なのだろうと感想を述べていた。小生はこの日本への客人のためにタクシーをふんばつしベイブリッジを見学し、横浜駅のルミネで寿司を食べてもらった。飛行機はエコノミーで充分だし、生活するだけのお金があればいいといていた。

その点、旧ソ連のZ助教授は全く異なる。彼は若いがかザフ共和国のT工科大学の国際担当副学長である。小生がかザフに呼ばれたり、昨年彼を八戸に3ヶ月滞在させたりした。その彼は円が好きである。円を要求する。八戸から帰ったあと、2ヶ月ぐらいて電話をかけてきて、九州で開催される国際会議に出席したいので新潟から博多までの交通費と宿泊費を都合して欲しいという。あれやこれや、いろんな人に経費を無心し2週間程日本に滞在して帰っていった。激動期を生きぬいていくにはすべて金にコンバートして考えるえげつなさが必要かもしれないが、日本人の感性では少しまいてしまう。

しかし、Z助教授は小生がモスクワの飛行場に着いたとき、タラップの下まで空港の車で迎えに来ているし、ゴルバチョフやエリチンが入るというVIPルームに案内してくれた。サンクトペテルブルグの空港で後の方に並んでいると、どう係員をいいくるめたかしのれないが、突然小生を最前方に並び代えてくれたりした。にくめないところもある。ソ連ではタフでなければやってけない。

チェコスロバキアのB教授とカザフ共和国のZ助教授の行動基準の違いは、おそらくは文化の違いに起因するものと考えられるのである。

国の東西を問わず、だれしもが時代の変動に洗われる。つらい時期もあればそうでない時代もある。ここで小生がとりあげた大学人はつらい時代を強く生き抜いている人達である。

日本は現在一見平安である。バブルがはじけたといえどもまだ子供達は優雅な生活が可能である。繁栄には限界があり、国際的にいろいろな摩擦も存在する。国際的に孤立することだけは避けなければならない。しっかりと「大地」に根を張った「行動原理」を確立すると共に各国に出来るだけ友人を作ることが最も要請される時代に入ったのではなからうか。

